始

4手278-122

土佐常昭、土佐光成 合筆　菊花雙鶉圖

絹本　竪二尺八寸五分　横一尺四寸五分

Quails and Chrysanthemums. By Joshō Tosa and Mitsumari Tosa.

(17th Century).

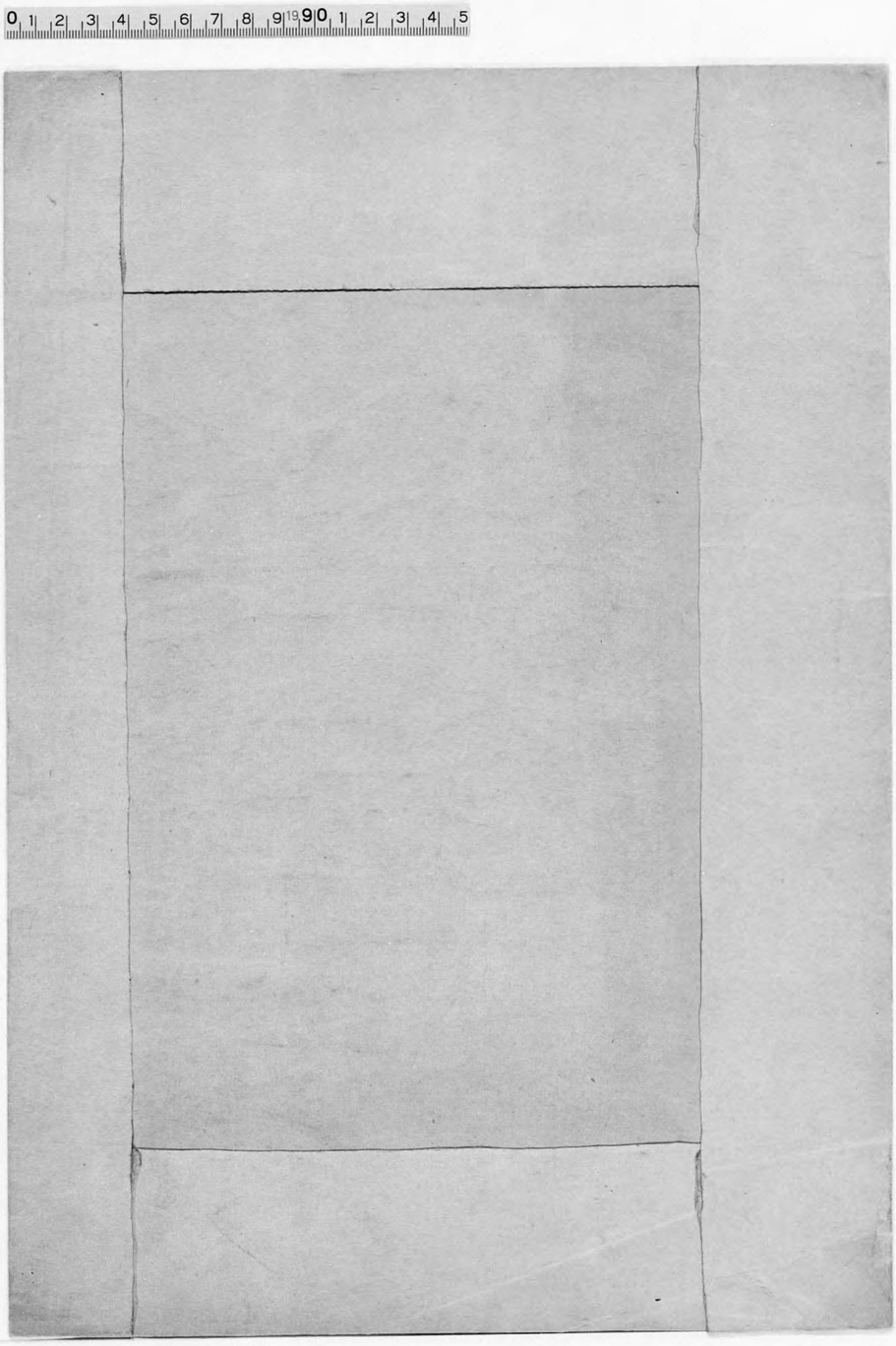
東京帝室博物館藏

菊花雙鶉圖は土佐法眼常昭並に其の子土佐將監光成との合筆に係る。土佐法眼常昭とは德川時代に於ける土佐派の巨匠光起の謂にして、彼が薙髪せる後の號なり。光起は天下に名高き土佐家の再興者にして、元和三年に生れ、寛永年中二十二歳にして父を喪ひ、それより祖父光吉の門人戸田光純に學び、刻苦勉勵して畫名漸く高く、遂に朝廷の庇護を受け、從五位下左近衛將監に叙せられ繪所頭となり、茲に土佐家再興の實を擧ぐるに至れり。薙髪して常昭と稱し法眼に叙せられ、元祿四年七十五歳にして歿す。子光成嗣ぐ、父の風を學んでよく家風を失はず。子孫代々京に住み、畫界に於ける一方の雄鎮たりき。そもゝゝ土佐家は有職故實を畫くに妙を得たりとは雖も、その筆細巧にして、微に入り細を穿ちたりければ、花卉鳥毛を寫しても細緻を盡せるものに、特に見るべきものあり。菊花雙鶉圖の如きは正にその特技を揮ふに適當なる題材なりといふべし。

土佐家に於てはその末流のものゝ雖も、往々鶉を圖するものありて、其の技頗る見るべきものあるは、これ實に光起が其の範を示したるによれるものなること疑なく、本圖の如きはその代表的のものといふことを得べし。想ふに光起の鶉圖も亦その先をなすものあるべく、恐らく李安忠の筆と稱するものに由る所あらん。李安忠は宋の畫人にして鶉を以て傳せらる。其の筆精緻にして賦彩も亦巧麗を極む。蓋し光起の筆を以て摸するに最も好適のものたらん。

本圖は實に光起父子の合筆に成り、菊花並にその枝葉の形態は眞趣を得て、これに雙鶉を配し、よく一幅の調和を得たり。土佐派を以てせる花鳥畫中、本圖の如きは特に注目に値するものにして、その標範となすに足るべし

鶉
法眼常暉筆
菊
法橋應挙筆



紫